

△見乞ひのさつくわ▼

—『祝本狂言集』の位置—

田口和夫

和泉流では△咲嘩▽、大蔵流では△察化▽

と表記しているこの曲名は、古い台本では仮名で「さつくわ」あるいは「みこひのさつくわ」と記され、『享保九年書上』でも、大蔵流・鶯流ともに△さつくわ▽のままである。

後に漢字を当てるようになって、ゆれており、大蔵流では「察化・察化」、鶯流では「察果・作花・颯花・察化・咲花」、和泉流では「見請殺咄(嘩)」。△咲嘩と、まことに多種多様である。どの曲も、スツパを「みこひのさつくわ」と呼んでいることは共通で、曲名も、この名によっているのだが、その語義が必ずしも明確ではなかったことが、漢字表記のゆれをもたらした原因であろう。大蔵流・鶯流の台本には、この語義を説明するセリフは無いが、鶯流の享保保教本には面白い行間の書入れがある。

見乞ト云フハ見タ物ハ人ノ目ヲ忍テモ取
乞テモ取トカク取ニ依ツテ見乞ト云ト子
細ヲ云流モ有路大倉ニハ不用言葉故有増

記

このようなセリフを持ち、鶯伝右衛門保教の目に触れた可能性があるのは、和泉流ともう一つ『狂言記外五十番』の狂言である。

和泉流最古の天理本では、

ミごいト云ハ、人の者ヲミテ、こうても
取やうな、物じやによつて、見ごいト云
さつくわト云ハ、ぬす人の、いみやうじ
や

という。これは和泉家古本、波形本ともほとんど共通だが、古典文庫本では少し詳しくなつて、現行、野村家の台本の、

尋常の盗人は、人の目顔を忍うで取る。

き奴は、見た物は乞ふても取るやうな者
じやによつて見乞、咲嘩とは盗人の異名。
というセリフとほとんど同じとなる。「人の
目を忍うで取る」という部分は、保教本注記
とのかかわりを思わせる所だが、『狂言記外
五十番』の記述は、それに先行している。

惣て世のぬす人は人の目顔をしのぶでと

る。あれハ人の物をぬすミてもとる乞て
もとる。それゆへ見乞といふ。さつくわ
とハぬす人のから名じや

これは元禄十三年(一七〇〇)に出版されて
いるので、保教本の他の狂言記関連の注記
とあわせてみても、保教がこれを参照したも
のと考えられる。和泉流の詳しくなった部分
も同じく狂言記を参照して増補された表現と
見てよさそうである。

私に興味があるのは、永井猛氏が『能楽研
究』十二号に翻刻紹介された『祝本狂言集』
にも共通する表現が見られることである。

ミごいのさつくわといふ名にしいある
事じや。何成共めに見るものをこうてと
るによつてミごいといふ。又さつくわの
といふハ、すツパのから名じや。こゝを
もツてミごいのさつくわといふ。

鴻山文庫蔵のこの本は、永井氏によって慶
長から寛永初年頃の間の成立と推定され、天
正狂言本と江戸初期諸本の間を埋める貴重な
台本と判断されているものである。私もその
ように認めてよいと思っているが、この部分
は天理本に近く、「から名」と言っていると
ころは狂言記に近い。現段階では、「見乞ひ
のさつくわ」という名の解釈は、これが本来
のものと考えてよいであろう。

「目に見る物を乞うて取る」ことを「見乞

ひ」と言うことには古い証拠がある。以前、八自然居士Vを論ずる時に用いた拔隊得勝の『塩山和泥合水集』下(思想大系『中世禅家の思想』所収)に生悟りの禅僧を批判して、信施ヲソソレズ、五辛ヲ喫シ、酒ヲノンデ、酔狂ノ氣紛々トシテ、仏ヲノリ祖ヲノリ、諸方ノ良善ヲ抑下シ、古今ヲ批判シ、高声多言ニシテ、戲笑ヲ好ミ、遊山翫水ヲ好ミ、終日ニ歌ヲ詠ジ詩ヲ吟ジ、花香風流ヲ愛シ、人ニ相逢テハ見乞ヲ推取ヲイタシ、勝様(なりふり)ニカ、ワラズ、僧俗ヲエラバズ、時節ヲ憚ラズ、説禅ヲコノミ、問答ニカチタルヲ以活計トス。(二四九頁)

「見乞ひ」が「推し取り」と並列されていることから見ても、狂言の「見乞ひ」と同じ意味であることは、まちがいないであろう。文明本節用集にも「見乞」の語がおさめられている。

「さつくわ」についての傍例はまだ得られない。『大蔵虎明本狂言集の研究』の八さつくわVの頭注には「すり・かたりの意とすれば、擦過がふさわしい」とある。『広漢和辞典』に「擦坐」という語をあげ「料理屋などで、押し売りに歌をうたつて金をもらう小娘」とする。「擦過」はあり得そうだが、「蹉過」もあり得る。用例がほしい所である。

この「見乞ひの擦過」が、国許へ下つてから、まったくスツパらしさを發揮しないのはすべての台本に共通した特徴である。祝本では、大名が「愠而あれハスツパなれ共世間ノひろうミてめはづかしい物じゃ」という。諸本とも、大名(主)はスツパを一目みただけで、都で有名な「見乞ひのさつくわ」だと氣付く。これらの要素をあわせ見ると、八末広がり・粟田口Vなどの買物取りちがえ型として成立する前に、誑惑法師的な僧形の者——それは例えば前引の、説禅・問答を生計の種とする禅僧的存在、それは自然居士的でもあるが——の活躍する狂言として、まず存在し、次いでスツパという形で一般化されたという筋道が想定できる。

祝本の冒頭は永井氏が指摘されたように、大名が連歌の稽古をはじめようと伯父を呼び下そうとする独特の形になっている。安永森本をはじめとする鷺仁右衛門派の台本も連歌稽古となっている所からすれば、これも祝本のみ流動ではなく、定型に整理される前の古型なのだと考えられよう。

(文政大学教授・法政大学能楽研究所員)